

三角縁神獸鏡の源流画像と斜縁・三角縁

賀川光夫

はじめに

近年、中国各地を訪問する機会が多く、とくに、天津社会科学院王金林教授のご厚意もあって、各方面の遺跡・遺物を尋ねることができた。その中でも注目して見学した資料に神獸を文様とする後漢時代の画像鏡や神人・神獸鏡がある。

日本では画像鏡と神獸鏡とは明確に区分しているが、中国ではものによって同じあつかいをしていることがある。たとえば、上海博物館所蔵の東漢永康元年八神人神獸画像鏡▽や中平四年八神人神獸画像鏡▽を、日本では八画文帯環状乳神獸鏡▽という名でよび、両者では若干の違いがある。中国では、内容によっては、画像鏡と神獸鏡とをかならずしも区別していない。こうした違いは、東漢と後漢という時代の基本的な呼び名にもあり、このあたりを、将来のためにも統一しておく必要があるように思う。

日本各地の四世紀代の遺跡から出土する三角縁神獸鏡の文様のもとには、どうやら後漢の神人神獸・画像鏡の



第1図 永康元年 神人神獸画像鏡（上海博物館蔵）

分析が必要であることはすでに述べられているところであるが、ここに、最近の新しい資料の一部を含めてその内容を検討してみたい。

1 後漢永康元年紀年神人神獸画像鏡を中心としてここで八神人神獸画像鏡という名称をもちいることにしたのは、最近、上海博物館より、陳佩芬編著『上海博物館蔵青銅鏡』⁽¹⁾という充実した書物が出版され、その分類にしたがうことにしたのである。後漢永康元年鏡（第1図）は、径二〇・三cm、鈕径三・一cm、縁高〇・六七〇・七一cmの平縁のもので、連珠文鈕座がある。内区の文様はレリーフで表出し、四つの神人と神獸により四区をもって構成される。神像は、東王公と西王母を上下に置き、両者とも、神鳥・神獸を配して守護守としている。東王公を下区としてみると、その右区には、左右に協侍と神鳥を配し、冕旒を着けた黄帝をあらわす。対する左区には、膝上に琴を横たえる伯牙奏琴の図をあらわす。左右に二神人があり、

左に脇侍、右には琴に傾聴して心を奪われる鍾子期を配している。

銘帯には、凸状の半円と方形を相隣配置して、各方形に四文字を刻み、十二方形に、左回りに銘文を入れている。すなわち、

「永康元年 正月午日 幽涑莫(黄)白 早作明竟 買者大富 延壽命長 上如王父 西王母兮 君宜高位
立至公侯 長生大吉 太師命長」

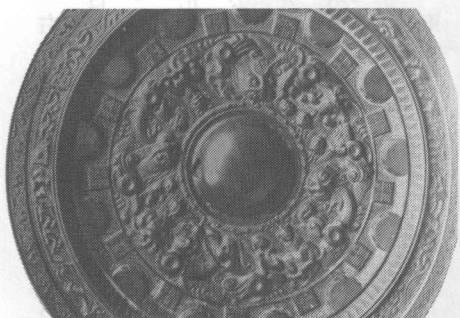
文字には左文字が含まれている。

銘文の外区には鋸歯文があり、ついで画文帯がある。陳佩芬などによると、画文帯は、二つに分けられる。その一は、『楚辞 九歌 雲中君』にみえる「有竜駕兮帝服」(竜が車をかける)にかかわるもので、六竜駕雲車の情景と考えられる。東皇太乙は、日神・月神の上座神であつて、最高神である。この竜駕神人を、東皇太乙以外に、日神とする意見もある。この竜駕に東皇太乙が乗り、日神羲和がこれを御し、天を運行する。その二は、羽人(神仙)乗獣(独角獣)・乗龜・乗鳥の画像列をつくる。これらの連結するところに、神人日を捧げ、月を捧げる。日の中に金鳥、月の中に蟾蜍がみえる。『淮南子精神訓』に「日中有踰鳥而月中有蟾蜍」とある。この日神は、先の東皇太乙を竜駕に乗せて天を運行する羲和で、月神は、『山海経』大荒西経にみえる常羲であると思われる。さらに、羽翼のある人面神があつて、そばに雲が流れており、風伯神であると考えられる。

この画文帯の構図は、日月の運行に関係のある説話が主体で、神仙思想による神像と瑞獣をあらわしているものである。永康元年鏡は、後漢桓帝劉志のとき、西暦一六七七年の鑄造であり、出土地は、河南と伝えられる。樋口隆康の分類²⁾によると、環状乳神獸鏡とし、その基本的な図像をこの永康元年鏡などの後漢鏡におくことを考えているようである。富岡謙蔵氏旧蔵と五島美術館蔵の同種鏡には、「早作尚方明竟」とか「熹平二年五月丙午圍造作尚方明竟・

・・・」などの銘文がある。

永康元年（一六七）紀年鏡と同種の神人神獸画像鏡に、中平四年（一八七）紀年鏡が知られている（第2図）。この中平四年鏡は永康元年鏡と類似するところが多い。中平四年鏡は、その径が一九・二cmと大型で、鈕径四・一cm、縁厚〇・六七〇・七八cm、連珠文鈕座があり、内区の図像は高肉彫りである。内区は四区に分けられ、四神獸を配する。銘文の「天王日月 太師命長」を基調におくならば、下区に東王公、上区に西王母を位置させることになる。東王公の左側には王女、右側には神獸、西王母の左側には神獸、右側には青鳥を配する。東王公の右区には、左右に柱状冠鳥と脇侍を配する黄帝を置く。対する左区には、琴を膝に置く伯牙奏琴の図があらわされている。神人二体の一は琴聞傾聴の鍾子期で、他の一は脇侍である。



第2図 中平四年神人神獸画像鏡の一部
（上海博物館蔵）

銘帯には、凸状半円と方形を相隔配置し、四字一組の銘文五十二字を十三個の方形に、左回りに陽鑄する。文字は左文字を含み、つぎの如くである。

「中平四年 五月午日 幽涑白同（銅） 早作明竟

買者大富 長宜子孫 延年命長 上如王父 西王母兮

大樂未央 長生大吉 天王日月 大師命長」

外区には鋸齒文帯と画文帯とがあり、永康元年鏡同様、『楚辭』による東皇太乙を中心とした六龍駕雲車の画像とみられ、さらに、羽人が独角獸・青鳥・亀に乗り、日を捧げ月を捧げる神人を彫刻している。銘文中の「買者大

富 長宜子孫」「大樂未央 長生大吉」など吉祥の語を連ねる特徴も、永康元年鏡に同じである。

永康元年・中平四年銘の二つの鏡は、これまで述べたように類似点が多いが、とくに、主体である神像のあらわし方を注意してみよう。

神像、すなわち東王公・西王母の像容をみると、その三山宝・卷髪の様子・羽根衣などすべての点で、わが国の△三角縁神獸鏡∨のそれと類似点が多い。もっとも、後漢鏡の瑞獸は右向きであるが、三角縁神獸鏡のそれらの多くは正面を向いている、といった違いはある。しかし、全体としては、共通するところが多いといえる。

このように、三角縁神獸鏡の画像は、後漢鏡に範をとって製作されたものであることは確実であろう。

2 画像鏡にみる斜縁と三角縁

画像鏡は、後漢代の画像石に類似した半肉彫りの画文をもって、民間に流行した神仙思想をあらわしているもので、神人・瑞獸を主題とした神獸鏡とは区別されてきた。

画像鏡には、車馬・騎馬・歌舞などがみられ、呉王・伍子胥などの人物故事を描くものがある。

また、画像鏡には、縁が斜縁(半三角縁)になるもの、三角縁になるものがあり、その多くが江浙地方において製作されている。

わたくしは、一九八一年と八六年に、上海博物館において、「龍氏作竟」銘の神人竜虎画像鏡を見学することができ、わが三角縁神獸鏡とまったく同じ周縁に注目した。

この△神人竜虎画像鏡∨は、径二一・二cm、鈕径三・四cmのもので、鈕座外圈には、三八の小さな連珠文が配置されている。内区は四乳によって四つの区画をつくり、東王公・西王母・竜・虎を配している。(第3図)



第3図 中国出土三角縁後漢後期末期鏡
(上) 龍氏作画像鏡 (上海博物館蔵)
(下) 巖氏作盤龍鏡 (山東省嘉祥県博物館)

図で示すように、下面に東王公を置き、その左右に侍者を配する。東王公には羽根衣がみえる。上面は西王母で、左右に同様の侍者を配する。むかって左区に躍動する竜、右区に虎をあらわす。全体に画像がわかりやすく半肉彫りの技術の高い鑄造である。

この文様は、大分県豊後高田市鑑堂古墳出土の劉氏作神人竜虎車馬画像鏡に、表現がよく似ている。⁽³⁾

銘文は、内区外縁を一周する三十文字からなる。一部不明なところがある。

「龍氏作竟自有道東王公西王母青龍在左白虎居右刻治囧囧皆在大吉」

外区は、櫛齒文帯・鋸齒文帯・雲形文帯とつづき、三角縁の外縁で終る。

竜氏作の鏡は一〇面以上知られており、一般に、紹興出土といわれている。

画像鏡には、三角縁の鏡体がほかにもみられる。たとえば、上海博物館蔵の既出とは別の神人神獸画像鏡（東王公

西王母・羽人・王女）も三角縁である。わが国のもものでは、奈良県北葛城郡河合町佐味田宝塚古墳出土の神人車馬

獸画像鏡⁽⁴⁾（二二、一cm）も周縁が三角縁である。

三角縁は、同じ上海博物館蔵の下除作方格規矩文鏡（十二支六博文鏡 第4図1-1）にもみられる。同様の鏡が、湖南省長沙掃塘・浙江省紹興漓渚・陝西省西安賀家村一号墓より出土しているというのであり、これらが三角縁であるとする、画像鏡のほか、後漢時代の各鏡種に、すでに多くの例があるものと考えられる。

斜縁（半三角縁）画像鏡の例はきわめて多い。ここでは、そのうちの柏氏作伍子胥画像鏡をみてみよう。（第4図21'2'）

この画像鏡は、径二〇・七cm、鈕径三・九cmのもので、鈕座には、三十八の連珠文をめぐらしている。

内区は、大形の四個の乳によって、4区に分けられている。第一区には、帷幕の中に座して左手を挙げる呉王夫差

第4図 三角縁神斜縁造鏡例

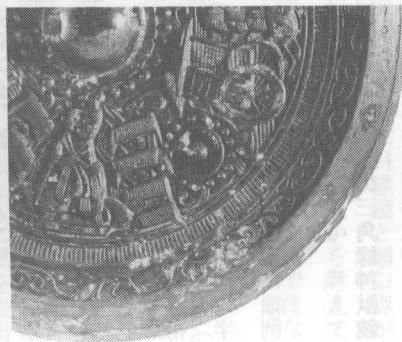
三角縁神獸鏡の源流画像と斜縁・三角縁



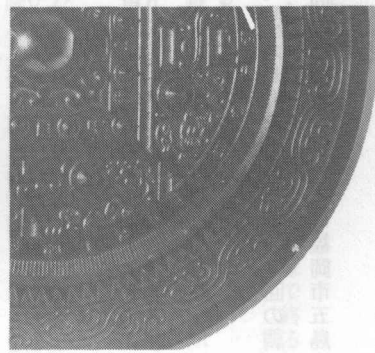
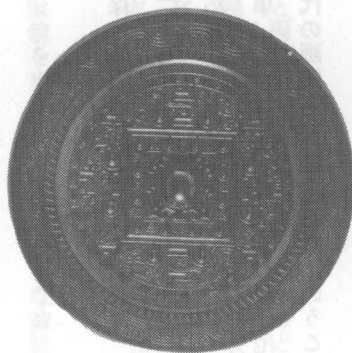
1-1' 斜縁伯氏伍子胥鏡



2-2' 斜縁神人車馬画像鏡



3-3' 斜縁神人車馬画像鏡



4-4' 三角縁方格規矩鏡

をあらわす。その左下に「呉王」の二文字をそえる。第二区には、怒髪にまなじりを決した伍子胥を描く。その左上にのびる方丈劍に接して「忠臣（臣は左文字）伍子胥」の文字がみえる。第三区には、ならび立つ二人の女人を描く。「王女二人」の文字がみえる。第四区には、立っている越王勾践と侍座する范蠡をあらわす。それぞれに、「越王」と「范蠡」の文字をそえている。

内区をめぐって、四十五文字からなる銘文がある。

「呉向里栢氏作竟四夷服多賀國家人民胡虜殄滅天下復風雨時節五穀孰長保二親得天力傳告后世樂無憂兮」

銘文中の「呉向里」の文字は、上海復旦大学文系の文物資料館蔵八二神二車馬画像鏡▽、銘文中にも、「呉向里周仲作鏡四夷服……」とある。この「呉向里」は、江浙地方のいずれかに求めることができよう。

内区四組の画像は、『史記』の越王勾践世家記載「呉王金檜を囲む」故事、または、呉の伍子胥、越の范蠡などの忠臣をあらわすもので、漢代の画像石にもちいられることが多く、この時代の画像鏡の一つの典型といえることができる。

さて、この八栢氏作伍子胥画像鏡▽は、銘帯の外区に、櫛函文帯・鋸函文帯・波文帯・鋸函文帯がつづき、鏡端にいくにしたがい厚みを増して、縁端が斜縁（半三角縁）に終っている。

斜縁（半三角縁）鏡は後漢末の画像鏡に類例多く、上海博物館には神人車馬画像鏡（第4図 3-13'、4-14'）などがある。

斜縁は、三角縁に近く、広義の三角縁神獸鏡には、この斜縁のものも含まれている。

斜縁鏡のわが国での例として、宇佐市川部免ヶ平古墳出土のものがある。一九七九年と八八年の二回の調査で、二つの主体部より、各一面、計二面の斜縁二神二獸鏡が検出されている。同種の鏡は、九州では福岡市五島山古墳、

東では滋賀県栗太郡大塚古墳など、現在のところ、十二か所の出土例⁽⁵⁾が知られている。

これらの鏡は、その外区が、櫛齒文帯にはじまって、鋸齒文帯・波文帯・鋸齒文帯とつづき、斜縁で終る特徴をもち、中国江浙地方の後漢時代斜縁鏡と類似点が多い。

このような斜縁・外帯文様や銘文から考えて、宇佐市免ヶ平古墳、栗太郡大塚古墳出土はじめ十二例の斜縁二神二獸鏡は、これまで伝えられてきた三国鏡ではなく、神人神獸画像鏡、つまり後漢画像鏡の一つの流れとみてはいかがであらうか。

また、三角縁神獸鏡のうち、二神二車馬鏡（岡山県車塚・山梨県銚子塚など）は、画像鏡である可能性が強い。とくに、銚子塚の四頭立ての馬車の画像は、上海復旦大学文系の文物資料館蔵△二神二車馬画像鏡▽とよく似ている。

3 三角縁盤竜鏡とその新資料

盤竜鏡は、後漢末から魏晋時代にかけて製作されたものである。単頭式と両頭式、それに三頭・四頭などの多頭式に分類される。後者には、竜とともに虎を表出するものがあって、△竜虎鏡▽とよばれることがある。一般に、竜形を大きくあつかい、体の一部が鈕の下にかくれてしまうほどである。ともに、平縁・斜縁・三角縁のものがある。

わが国では、三角縁神獸鏡とともに、前期古墳から出土する例がある。大分県宇佐市赤塚古墳⁽⁶⁾からは、三角縁神獸鏡四面とともに出土している。ともに三角縁である。

京都府福知山市広峰十五号墳出土の△景初四年銘盤竜鏡▽は、三角縁神獸鏡をめぐる論争に、大きな波紋を投げかけている。

中国社会科学院考古研究所王仲殊所長⁽⁷⁾は、中国魏のこの元号はその三年までは存在するが、翌年元旦に△正始▽と改められた。したがって、景初四年は存在せず、この銘をもつ前述の盤竜鏡は中国で製作されたものではないとする。

一方、近藤喬一教授は、楽浪・帯方の紀年銘博、西晋武帝の紀年銘博など、改元後も旧元号を使用した例をあげ、八景初四年ノ銘をもって中国製作説をただちに否定することはできないとしている。また王金林教授（天津社会科学院）は景初三年後十二月を四年としたとして納得のいく考へを述べている。

このことについては深入りするつもりはないが、ここでは、前述景初四年銘盤竜鏡と同じ種類の三角縁盤竜鏡の新資料を紹介しておきたい。

新資料である三角縁盤竜鏡は、山東省嘉祥県の隋代古墓より、一九八六年に発見された。王金林教授によると、墓の主は隋朝江南地方の官吏であろうとし、その祖に南北朝時代の南齊か北齊の官吏があり、長江中・下流で製作されたこの鏡が伝世され、のちに、墓に納められたとみている。（第3図 下）

この鏡は、径一二・九cmの三角縁鏡で、大型の鈕をはさんで三頭の竜が内区いっぱいにあらわされている。

銘帯には、つぎの文章がある。

「嚴氏作五月丙午竟避不羊子孫千巧樂未央□當大富宜候□□二親兮」

銘帯の外周に、櫛齒文帯が二重にめぐり、ついで波文帯がある。波文帯は復線で三角縁の外縁と仕切られている。王金林教授は、江南地方で製作された後漢末期の鏡と考えられるとしている。

この種の盤竜鏡が比較的まとまって、平壤市大同江地帯から発見されている。これらは、径が一一cmから一四cmと日本出土のものにくらべると小型であり、銅質も、黒色をおびた良質のものを使用している。前述の大分県宇佐市赤塚古墳出土の大型盤竜鏡とは、いちじるしく違っている。これらの製作技法上の違いとその理由については、さらに検討をすすめる必要があると考えている。

中国江浙地方の神人神獸鏡の図像が、わが国の三角縁神獸鏡図像と、一つ一つが符号したように類似していることを、後漢の永康元年・中平四年銘鏡の神獸画像を通じて、理解することができた。

わが国で△画像鏡▽として分類されている後漢鏡には、かなり多くの斜縁（半三角縁）鏡がある。これらの中には、銘帯外周の文様帯に、櫛歯文・鋸歯文・波文・鋸歯文をめぐらせるものがあり、三角縁神獸鏡の外帯文様と同様である。

さらに、三角縁については、さきに挙げた竜虎画像鏡や下除作方格規矩文鏡（十二支六博文鏡）などの後漢鏡にみることができる。ほかの例として、江浙省博物館蔵の車馬人物画像鏡、紹興文物管理处の四乳四禽鳥鏡・方格規矩文鏡⁽¹⁾をあげることができよう。

景初四年銘で問題の盤竜鏡については、新例として挙げた山東省嘉祥県隋墓出土の敵氏作鏡のほか、かなりの数があげられる。さらに、その小型で良質のものが、朝鮮半島の大同江流域で多く発見されていることから、後漢・三国時代を通して、三角縁盤竜鏡の東方への流入を示すものと考ええる。

さて、神獸画像、櫛歯文・鋸歯文・波文などの外区の文様帯、斜縁と三角縁などが、後漢時代の銅鏡にさかんにもちいられたことはこれまでの例の示すとおりである。そして、これらの鏡は、江浙地方の地域で製作された可能性が強い。江浙地方の文化は、古くから日本列島各地に影響を与えてきた。鏡についても、さきに挙げたいくつかの例のほか、山梨県鳥居原古墳、兵庫県安倉古墳などの赤鳥七年鏡や、岡山市上庚申山古墳、神戸市夢野丸山古墳の対置式・重列神獸鏡などは、そのよい例といえる。

くりかえし述べたように、日本出土の三角縁神獸鏡の問題を検討するにあたっては、後漢時代の江南鏡の所在を重

視する必要があるのではなからうか。

本稿に挙げることでできた中国側の資料については、一九八五年と八七年、上海博物館において、陳佩芬先生他のご指導により、充分見学することができた。呉傑教授・王金林教授・趙建民教授は、その都度御同行され、ご指導をいただいた。また、復旦大学文系湯綱主任・呉告伸教授には、たびたびご教示を仰いだ。これらの諸先生に、心から御礼申しあげる次第である。

〈注〉

- (1) 陳佩芬編著『上海博物館藏青銅鏡』上海書画出版社 一九八七
- (2) 樋口隆康『古鏡』新潮社 一九七九
- (3) 賀川光夫「東九州における二、三の在銘鏡」『日本大学考古学通信』四号 一九五七
- (4) 梅原末治『佐味田及び新山古墳研究』一九二一
- (5) 小田富士雄・真野和夫『免ヶ平古墳』一九八六
- (6) 梅原末治「豊前宇佐郡赤塚古墳調査報告」『考古学雑誌』一四卷三号 一九二三
- (7) 王仲殊「関于日本三角縁神獸鏡の問題」『考古』一九八一・四
- (8) 『呉の鏡師陳是製作の神獸鏡を考える』奈良国立文化財研究所 一九八六
- (9) 近藤喬一「景初四年銘鏡私考」『考古学雑誌』第七三卷三号 一九八八
- (9) 王金林「鏡師陳是について」『別府大学紀要』第三〇号 一九八九年
- (10) 山東省嘉祥県隋代古墓については、天津社会科学学院日本研究所王金林教授のご教示による。掲載の写真も同教授の提供によるものである。

(11) 浙江省博物館および紹興文物管理処の後漢鏡についても、王金林教授の資料提供によるものである。

著者紹介

羅其湘教授は一九二三年十一月、江西省九江県にて出生、一九五〇年国立南昌大学卒業。一九五六年南京師範学院地理系をへて徐州師範学院副教授、現在教授。江蘇省地理学会常務理事、中国徐福研究会副会長の要職を努める。なお共同研究者の武利華氏は徐州博物館主事を努め、漢代画像墓の著名な研究者である。

一九八七年天津社会科学院日本研究所王金林氏の案内で徐州師範学院を訪問、羅其湘教授に面接「銅出徐州」の銘文を刻む三角縁神獸鏡の高説を聞いた。その際拝読したのが「日本出土三角縁神獸鏡銘文八銅出徐州／考弁」『徐州師範学院学报』（哲学社会科学版）一九八七年一期）であった。羅其湘教授の許しを得て日本訳をおこない、掲載することになった。日本語訳には特に注意し、中国鉱業学院外国語系（日本語）、劉迎氏、別府大学宇野世史也をわずらわした。劉迎氏は、徐州滞在中、師範学院における特別講義において流暢な日本語を話し、中国訳を通じて教授、学生との交流を深めることができた。

一九八八年三月十五日（賀川 光夫）

Origin of the mirror of the triangle edge with carved divine beasts in reference to the inscription, "Tong chu Xu-zhou" 銅出徐州 (Copper from Xu-zhou).

羅其湘 (Luo-Qixiang) 武利華 (Wu-lihua)

賀川光夫 (Kagawa Mitsuo)

In November 1987, with generous support of Professor Luo at Xu-zhou Teachers' College, I could examine several carved tombs, carved stones, and tomb figures of the Han period at Xu-zhou. At that time I had an opportunity to read Professor Luo's inspiring article, "Discussion on 'Copper from Xu-zhou' in the inscriptions of the mirrors of the triangle edge with carved divine beasts found in Japan" (1986). This article illuminates an important issue on the site of the copper mine at Xu-zhou in reference to this part of the inscriptions, "copper from Xu-zhou; craftman from Luoyang 洛陽" engraved on some of the mirrors of the triangle edge with carved divine beasts found in Japan.

We find descriptions on divine beasts (like the ones carved on the mirror) in Chinese classic literature (e.g., Chuci). A group of mirror craftmen who inhabited the lower reaches of the Changjiang 長江 and specialized in making mirrors seem to have adopted the design of divine beasts and have carved them on the mirror.

Kagawa's paper supplements Professor Luo's with focus on these mirror craftmen. I hope our cooperation will throw light on some historical problems in both Chinese and Japanese cultures and in their interactions.